

# 「政権交代の歴史 ～長続きさせる秘訣とは」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

【※このレジュメは、講演当時（平成22年7月）から大幅に改変していますが、その後の政権交代などの出来事を加筆するなど、より充実した分かりやすい内容となっております。どうぞお楽しみください】

## 1. 我が国における「政権交代」の歴史とは

平成24（2012）年12月16日、我が国において第46回衆議院議員総選挙が行われ、それまでの民主党に代わって自由民主党（＝自民党）が300近い議席数を獲得して第一党となり、同月26日に公明党との連立による第二次安倍晋三（あべしんぞう）内閣が誕生しました。

その前に行われた平成21（2009）年8月の第45回衆議院総選挙においては、民主党が大勝して自民党から政権を奪うなど、ここ数年間で大規模な政権交代が続いていることとなりますが、こうした交代劇は、現代においては「選挙」という平和的な手段で行われているのが大きな特徴です。

神話の時代を含めれば、2670年以上もの間ずっと同じ血統を保っておられるという、世界でも例のない稀有（けう）な存在である皇室をいただく国家である我が国は、皇室の下では歴史上に何度も政権交代が行われてきました。

例えば、皇室や公家（くげ）などの朝廷から政治の支配権が武士に移った鎌倉幕府の誕生という歴史的な出来事がありましたし、その鎌倉幕府においても、源氏からいつの間にか北条氏（ほうじょうし）に政治の実権が移動しています。

また、鎌倉幕府が倒れた後に後醍醐（ごだいご）天皇によって一時的に朝廷による政治が復活しましたが、すぐに足利尊氏（あしかがたかうじ）が政治の実権を武士の下に戻しています。

この他にも戦国時代に終止符を打った織田信長（おだのぶなが）・豊臣秀吉（とよとみひでよし）・徳川家康（とくがわいえやす）のいわゆる三英傑や、黒船が我が国に来航して以降の幕末の混乱から明治政府の誕生など、政権交代の例を挙げれば、それこそ枚挙に暇（いとま）がありません。

これらの「政権交代の歴史」を振り返った際に、共通する「ある思い」が存在していることを皆さんは気づいておられるでしょうか。

今回の講座では、我が国における政権交代のそれぞれの歴史をたどるとともに、その原因や問題点

を探り出すことによって、今後の我が国のあり方について国民の一人一人が真剣に考えることが出来るための問題提起になることを目指しながら進めたいと思います。

## 2. 平氏政権の誕生 ～悲劇の開拓者

約 400 年も続いたことや、その名前から一般的に「平和な時代」という印象が強い平安時代ですが、実際はまるで逆であり、国全体で、特に地方を中心に争いが絶えなかったという事実については、これまでに私が過去の講座の中で何度か述べてきたとおりです。

その原因として真っ先に挙げられるのが、朝廷によって我が国直属の軍隊が廃止されたことです。その後、朝廷周辺には現代の警察に相当する検非違使(けひいし)が設けられたことで辛うじて治安が守られましたが、地方においてはそれこそ何の対策も行いませんでした。

その結果、地方では盗賊を中心に力あるものが支配する世の中となったことで、数多くの生命や財産が奪われることになり、人々は自らを守るために自然と武装するようになりました。これこそが武士が誕生するきっかけの一つです。

各地で武士が誕生し、その武装力を高めることによって、いつしか地方を中心に武士が世の中を支えるようになりましたが、その武士たちには大きな悩みごとがありました。それはいわゆる「土地問題」です。

平安時代の頃までに、それまでの公地公民の原則が完全に崩壊して、荘園制度が全盛期を迎えていましたが、この制度には大きな欠陥がありました。それは、荘園の所有が上流貴族や寺社のみ認められていたということです。

実際に田畑を耕しているのは他ならぬ武士たちなのですが、朝廷は彼らの所有を認めようとしませんでした。困った武士たちは、仕方なく摂関家などの有力者に土地の名義を移し、自らは「管理人」の立場となりましたが、これほど不安定な制度はありません。

「自ら開墾(かいこん)した土地は、自らの手で堂々と所有したい」。武士たちはいつしかこうした切実な願いを持つようになりましたが、武士の心の内が理解できない公家たちによって政治が行われている以上は、その願いは叶(かな)えられそうもありません。

こうして実際に時代を動かしてきた武士たちの思いによって、朝廷から武士への「政権交代」の雰囲気次第に高まっていきました。この中から、やがて「武士として初めて政治の実権を握った」ある勢力が誕生するのです。

平安時代の末期に、その武力や財力によって朝廷内の地位を高めた武士の一族がありました。桓武平氏の流れをくむ伊勢平氏のことです。中でも平清盛(たいらのきよもり)は、そのずば抜けた実力によって、1156年の保元の乱や、1159年の平治の乱を通じて勢力を拡大していきました。

当時の武士の多くも、清盛の出世ぶりを注目していました。自分たちと同じ武士である清盛であれば、武士の悲願である「自ら開墾した土地を自らの手で所有する」ことをはじめとした「武士のための政治」を実現してくれるに違いない、と期待していたのです。

武士たちの後押しを受けて、清盛は武士として初めて太政大臣(だじょうだいじん)に昇進したことなどによって、ついに政治の実権を握ることに成功しました。我が国初の武士による政権の誕生です。

しかし、幼い頃から皇室や公家と接することの多かった清盛には「武士のための政治」がどのようなものであるかが理解できていませんでした。

「武士のための政治」に対するビジョンを持っていなかった清盛は、自らが安徳(あんたく)天皇の外戚(がいせき、母方の親戚のこと)となるなど、摂関政治の真似をする以外に政治を行うことができず、やがては貴族化してしまいました。

この結果、武士たちの待遇は平氏が政権を取った後もほとんど変化がなかったのです。同じ武士だからと大きな期待をかけていただけに、武士たちの多くは「平氏は俺たちを裏切ったんだ」「どうして俺たちの思いが分からないのか」と不満を爆発させました。その一方で、それまで武士を見下していた貴族たちも、清盛が自分たちの真似をしたことに強く反発しました。

せっかく誕生した平氏政権は、武士からも貴族からも拒否されてしまったのです。初めてであるがゆえに確固たるビジョンを持ってない「開拓者」としての悲劇でもありました。

それでも強固な武力や経済力を持った平氏政権は、この後も当分の間続くと思われていたのですが、現実には清盛の死後わずか数年で滅亡してしまっています。

なぜ平氏政権はあっけなく崩壊したのでしょうか。

### 3. 鎌倉幕府の誕生 ～源氏から北条氏へ

平氏政権の後に政治の実権を握って鎌倉幕府を開いた源頼朝(みなもとのよりとも)ですが、彼自身は数奇な運命に翻弄(ほんろう)された人生を過ごしました。

頼朝は清和源氏の血を引いた、武士の中でも地位の高い若武者でしたが、1159年の平治の乱に敗れて平氏に捕まり、このままでは処刑されるところを危うく助けられましたが、伊豆へと追放されてしまいました。

流人(るにん)という身分で過ごした長年の伊豆での暮らしは決して楽ではありませんでしたが、頼朝はこの当時に様々な体験をすることによって、武士たちの日常の生活やその願いなどがよく分かるようになっていました。頼朝は、若い頃に言わば武士としての「実地訓練」を積んだのです。

頼朝はやがて平氏打倒に立ち上がると、当初は苦戦したものの、次第に武士たちの同意を得て大勢

力となっていきました。平氏に一度裏切られた武士たちでしたが、自分たちと同じ経験をした頼朝であれば、今度こそ期待に応えてくれるに違いないと判断したのです。

逆に言えば、当時の国民の代表たる武士の期待を裏切ったために、平氏政権は長続きできなかつたのでした。

頼朝によって平氏政権は倒され、1192年に頼朝が朝廷から征夷大將軍に任じられたことによって鎌倉幕府が開かれましたが、幕府の代表的な組織として、軍事・警察権をつかさどった守護や、公的に認められた土地の管理人である地頭が置かれました。

守護や地頭の任命権は幕府にあったため、幕府の保護を受けた地頭が勢力を拡大していくことによって、武士の悲願であった「自ら所有する土地の権利を正式に認めてもらう」道を開くことになりました。

頼朝による「武士のための政治」が実現したことで、鎌倉幕府の未来は順風満帆のはずだったのですが、ここで頼朝が大きな失敗をしてしまいます。1195年に、頼朝は自分の娘を天皇の妃(きさき)にしようと計画したのですが、これは絶対にやってはいけない「禁じ手」でした。

「自分の娘を天皇の妃とし、生まれた皇子が天皇に即位して自分は外戚となる」という手法は、平氏政権のやり方と全く同じだからです。つまり、源氏が貴族化する道を開くことになり、武士の権利が再び朝廷に奪われるかもしれないという危機感を与えてしまったのでした。

結果的に頼朝の思惑は失敗に終わりましたが、武士たちからすれば、頼朝の行為は重大な裏切りであり、許せないことだったのでした。

頼朝は1199年に急死し、代わって子の源頼家(みなもとのよりい)が2代將軍になりましたが、まだ若かったこともあって、頼家の母方に当たる北条氏が他の有力な御家人を倒し、執権として政治の実権を握るようになりました。

やがて北条氏は、將軍の頼家も追放したうえで暗殺し、弟の実朝(さねとも)を3代將軍としましたが、頼朝が最終的に武士の信頼を失ったことで源氏を守ろうとする者は少なく、頼朝の妻の北条政子が「尼將軍」として君臨するなどによって、北条氏による政権の「乗っ取り」が武力を背景に認められていったのです。

さて、政治の実権を奪われた將軍実朝は和歌をたしなむ人生を送りましたが、後鳥羽(ごとは)上皇が和歌つながりで実朝に巧(たく)みに接近し、幕府を朝廷の支配下にしようと計画されました。

このままでは幕府が朝廷に乗っ取られてしまうという危機を感じた武士たちでしたが、そんな折の1219年、実朝が頼家の遺児の公暁(くぎょう)に暗殺されたことで、頼朝以来の源氏の血がついに絶えてしまったと同時に、後鳥羽上皇の幕府乗っ取りの計画が破られてしまいました。

実朝を利用しての幕府乗っ取りには失敗されたものの、実朝暗殺による混乱を好機と見られた後鳥羽上皇は、ついに北条氏追討の院宣(いんぜん、上皇からの命令書のこと)を出されました。つまり、北条氏は朝敵(=朝廷にそむく敵のこと)になってしまったのです。

武士たちの多くは自身が朝敵となってしまったことに動揺しましたが、一方で以前の惨めな暮らしに戻りたくないという思いも根強く、結局上皇の計画は阻止されました。1221年のこの戦いを承久の乱といいますが、尼将軍の北条政子(ほうじょうまさこ)による一世一代の演説も有名ですね。

こうして1159年の平治の乱から1221年の承久の乱までのわずか60年余りの間に政治の実権が激しく移動したり、あるいは移動しそうになったりしましたが、これらの背景には、当時の国民の代表たる武士の「意思を理解し、願いを実現しているか」の是非があります。

朝廷では武士の願いは叶えられそうになかったことで、全国の武士は平氏政権誕生を後押ししましたが、平氏が貴族化したことで「武士のための政治」を行わなかったことが裏切りとみなされ、多くの武士が源氏に味方したことで平氏は滅亡しました。

源氏は鎌倉幕府を開きましたが、頼朝が自分の娘を天皇の妃にしようとするという、平氏政権の「二の舞」を演じようとしたことで、多くの武士が源氏を見限り、後には朝敵となったにもかかわらず、北条氏を中心とする政権に移行していったのです。

こうした「武士の思いを実現できているか」に関しては、承久の乱の約100年後に再び問われるようになりました。

#### 4. 建武の新政と戦国三英傑の明暗 ～時代の流れを読む眼力の違い

北条氏による鎌倉幕府の政治はその後も続きましたが、元寇(げんこう)の影響や、分割相続が繰り返されたことなどによって御家人の窮乏化(きゅうぼうか)が進んだことで、幕府に対する反発が次第に大きくなっていました。多くの武士たちは「もはや鎌倉幕府に政治を任せられない」と思い始めていたのです。

そんな中で、後醍醐天皇が、政治の実権を朝廷に取り戻すために立ち上がりました。天皇は倒幕に二度も失敗され、一時は隠岐(おき)に流されながらも最終的に鎌倉幕府を滅ぼすことができたのは、天皇と武士の思惑が「鎌倉幕府には政治を任せられない」ことで一致したからでした。しかし、幕府が倒れた後に後醍醐天皇が建武の新政を行い、武士の願いを無視した天皇親政が行われたことが、両者の間に亀裂を生みました。

武士たちは勢力が衰えて政治を任せられなくなった幕府の代わりに、他の武士による新しい組織のもとで、これまでどおりの「武士による、武士のための政治」を続けることを望んでいたからです。そして、そんな空気を読んだ足利尊氏の「裏切り」によって、建武の新政はわずか数年で終焉(しゅうえん)を迎え、新たに武士による室町幕府が成立したのでした。

足利氏による室町幕府は、源氏や北条氏と違ってカリスマ性や実力面で劣るところがあり、また足利氏と同じだけの勢力をもつ守護大名が多かったことによって、次第に衰えていきました。さらに1467年に応仁の乱が起こったことによって幕府の実権は事実上なくなり、全国各地で身分の下の方が上の者の勢力をしのぐという、下剋上(げこくじょう)が盛んとなる戦国時代となりました。

そんな中、強大な武力を背景とした宗教勢力が、特にその実力を示すようになりました。宗教勢力は自己の支配地に多額の税金をかけることで資金を集めて武力を拡大したり、また宗教勢力同士の争いで周辺が焼け野原になったりするなど、いつしか宗教勢力は、人々の暮らしや商業の発達に大きな障害となっていました。

当時の人々の多くは、大きな障害と化した宗教勢力を追放して、元の過ごしやすい世の中に戻してほしいと熱望していましたが、そんな中で現れたのが織田信長だったのでした。

信長は自己の武力を担保に宗教勢力に武装解除を迫りましたが、利権を手放したくない宗教勢力はこれに反対し、逆に信長を滅ぼそうとしました。生命の危機を感じた信長は激怒して、比叡山延暦寺(ひえいざんえんりやくじ)を焼討ちし、一向一揆(いっこういっき)の勢力を、女子供に至るまで皆殺しにしました。

信長は志半ばで本能寺の変によって倒されましたが、後を継いだ豊臣秀吉によって天下が統一されるとともに、宗教勢力への対策も引き続き行われました。例えば高野山金剛峯寺(こうやさんこんごうぶじ)に武装解除を迫って成功させたり、京都の方広寺(ほうこうじ)の大仏落成の際には全国の宗教団体を招待して、自分の支配下に置かれることを認めさせたりしています。

秀吉の死後に江戸幕府を開いた家康も、宗教勢力の弱体化を目指しました。例えば、一向一揆を繰り返すなど屈指の武闘派であった浄土真宗の本拠地である本願寺を東西に分け、お互いが争うことで幕府に対して逆らわないようにするという分割統治に成功しました。

また、家康の死後には檀家(だんか)制度を採用して、国家権力が寺院に権益を与えることで逆に統制し、宗教が政治に関わる必要を一切なくしてしまいました。本願寺の分断や檀家制度は現代においても続いており、家康や江戸幕府による行政手腕がいかに高かったのかを間接的に証明していますね。

結果として暮らしへの大きな障害となっていた宗教勢力の武装解除を望んでいた国民の期待に応えたからこそ、信長から秀吉、そして家康に至る政治は国民の支持を受け、江戸幕府が長く存続したという一面が見受けられるのです。しかし、そんな江戸幕府の政治能力にも限界が見られるようになっていきました。

## 5. 江戸幕府から明治維新へ ～幕府の足を引っ張った学問

主君に絶対の忠誠を誓い、また徳のある者が天下を制するとした朱子学は、江戸幕府による政治に都合が良いとして幕府公認の学問となりましたが、これにはとんでもない「落とし穴」がありまし

た。

「徳のある者が天下を制す」とありますが、徳のある者が本当に幕府なのかどうかという疑問が次第に投げかけられたのです。時が経つにつれて、徳があるのは幕府ではなく、我が国に長い間ご存在されておられる天皇であるという考えが一般的になり、幕府公認の学問によって幕府の存在を否定するという大きな矛盾をもたらしてしまいました。

また、儒教に由来する朱子学が公式の学問になったことで、幕府の政治は商業を軽視あるいは無視して農業を中心とする重農主義が中心となりましたが、これは 17 世紀後半の元禄時代の頃から、経済が発達して商業中心の社会となった世の中の流れと完全に逆行していました。

特に享保・寛政・天保のいわゆる江戸の三大改革における農業重視・商業軽視の姿勢は明白であり、田沼意次(たぬまおきつぐ)らによる開国も視野にいれた重商主義は、その存在すら徹底的に否定されました。

こうした幕府の政治手法が、やがて「大きなツケ」として、江戸幕府のみならず、我が国全体に大きくのしかかることとなります。

幕府が成立した 17 世紀前半の世界では、キリスト教のカトリックを信仰したヨーロッパ諸国による世界各地の植民地化が進んでおり、我が国も例外ではありませんでした。このため、幕府はカトリックを禁教にするとともに信仰する諸国との国交を断絶し、同じキリスト教でもプロテスタントであり、我が国での布教をしないと約束したオランダや、同じアジアの国同士である清国や李氏朝鮮など、限られた国との間でしか貿易を行いませんでした。

制限貿易にはこうした事情があったうえに、国交断絶という強硬な手段が可能だったのは、戦国時代からまだ時間が経っておらず、全国で数十万の武士が健在という強大な武力があったからこそでした。

しかし、制限貿易を始めてから平和が長年続くうちに、我が国では武力よりも学問が重視されるとともに、制限貿易の意味が履(は)き違えられて、諸外国との交渉を一切行わないという鎖国(さこく)が当たり前と考えられるようになってしまいました。

一方、我が国で平和が続いている間に世界の流れは大きく変わりました。蒸気機関を利用したいわゆる黒船が開発されたことで、それまで「海に囲まれて安全な国家」であった我が国が「海上のどこからでも狙われる危険な国家」へと大きく変化していたのです。

ところが、我が国を動かしていた幕府は平和をむさぼり続け、開国を勧告する勢力が国内外で現れてももみ消し、また学問が重視されたことでいつしか幕府自身の武力も著(いちじ)しく低下していました。このような外国にとっては絶好の、そして我が国にとっては最悪のタイミングで黒船が浦賀にやって来てしまったのです。

1853年、アメリカのペリー率いる黒船の来航に幕府は大慌てとなり、翌1854年にはアメリカの言われるままに無理やり開国させられ、さらに1858年には日米修好通商条約という相手方にのみ領事裁判権を認め、我が国に関税自主権がないという不平等条約を結ばされるという失態を演じてしまいました。

また、開国の際に幕府は自分たちだけで国論をまとめることができず、諸藩に意見を伺(うかが)っているのですが、これは武力で我が国を支配したはずの江戸幕府にしてみれば、武家政権にあるまじき弱腰の方針でした。こうした幕府の姿勢に加えて、朱子学によって天皇こそが我が国の中心であるとする思想が広まったことが、幕末の激しい尊王攘夷運動(そののうじょういうんどう)へとつながる一因となりました。

もし幕府が重商主義を標榜(ひょうぼう、主義や主張などをはっきりと示すこと)して早期に自主的に開国していれば、幕末の混乱もなかったでしょうし、また明治新政府が誕生したとしても、徳川家は重要な地位を占(し)めることが可能だったでしょう。幕府のある意味頑(かたく)なで、また一気にブレまくった政治姿勢は多くの国民の支持を失い、明治維新へとつながってしまったといえるのです。

## 6. そして現代へ ～政権維持のカギを握るものとは

ここまで振り返りましたように、昨年の衆議院総選挙の結果のみならず、我が国は昔から何度となく政権交代の歴史を経験していますが、これらに共通している「法則」があることを皆さんはご存知でしょうか。

それは、時の政権が「国民の支持を得ているかどうか」ということです。武力などによって世の中を統一することができたとしても、それが国民の理解を得られなければ、その支配は決して長続きできないのです。平氏や源氏、北条氏や後醍醐天皇、さらには江戸幕府も、当時の国民の代表たる武士や、あるいは国民全体の支持を失ったことでその役割を終えることになりました。

そして、この法則は現代においてももちろん変わることがありません。例えば、第二次世界大戦の終戦からちょうど10年後の昭和30(1955)年、いわゆる「保守合同」によって自民党が誕生し、政権政党として長いあいだ我が国を引っ張ってきました。

しかし、自民党はその綱領において「我が国の自主独立の完成」を期するとし、将来的な自主憲法の制定やアメリカに依存した国防体制の転換が望まれていたにもかかわらず、実際にはアメリカの「核の傘」に入り続けることで経済発展に専念し、その結果我が国は奇跡的な経済復興を遂げるとともにアメリカに次いで世界第二位の経済大国と呼ばれるまでに成長しました。

経済の発展そのものは確かに多くの国民の願いだったかもしれませんが、しかし、経済復興の成果などによって国会で常に安定多数の議席数を確保するようになった自民党は、次第に結党の精神であった「自主独立の完成」を忘れ去ると同時に国家として生命線である「国の守り」をおろそかにするようになってしまいました。

政治家の一人ひとりが「目先の票の確保」に血眼(ちまなこ)となり、国家や国民のため、あるいは将来の世代のために我が国の古き良き伝統を守ろうとする姿勢を次第に見失った自民党はもはや「保守政党」とは呼べなくなり、国民の信頼を失ったこともあって、平成5(1993)年の衆議院総選挙で敗れ、結党以来38年間守り続けた政権の座から滑り落ちました。

その後の自民党は約1年後に、かつては考えられなかった日本社会党(現在の社民党)との連立によって政権に復帰し、やがては公明党と連立して政権を維持し続けましたが、21世紀を迎えても基本的に変わらなかった党の体質がついに国民に愛想を尽かされ、平成21(2009)年の衆議院総選挙で民主党に大敗を喫したのです。

ところが、自民党に代わる政権政党として期待された民主党は、その主体性のなさもあって自民党よりもはるかに劣ることが明らかになり、平成24(2012)年12月の衆議院総選挙で自民党は公明党との連立によって政権の地位に返り咲くことができましたが、その総得票数は3年前の選挙と比べて劇的に増加している訳ではなく、言わば民主党の「自爆」に助けられたという印象がぬぐえません。

現在、自民党は再び総裁の地位に就いた安倍晋三氏が第三次内閣を組織して、アベノミクスを中心とした景気回復を至上命題とする経済政策が評価されつつあるようですが、長年の偏向した教育を遠因とするモラルハザードを筆頭とした我が国の精神面での崩壊や、竹島や尖閣(せんかく)諸島など我が国固有の領土をめぐる問題がクローズアップする昨今においては、もはや教育あるいは国防をめぐる政策を抜きにして、政治を語ることはできません。

現代の国家における危機への対処のみならず、将来の我が国の繁栄を見越した「国家百年の計」を目の前に示さない限り、国民の期待に応えられないと判断された政党はその信頼を失い、別の政党にとってかわられることでしょう。自民党が二度と政権の座を失いたくないのであれば、多くの「国民の声なき声」を聴く耳を持つ姿勢が不可欠です。

政党や政治家の使命は「いかに国民の信頼に応えるか」と同時に「いかに国益のために自己の政治生命を賭けるか」であり、それが出来ないようであれば潔く退場していただくほかはありません。

そんな当たり前のことを政治家には常に肝に銘じていただくとともに、私たち国民も「真の政治家を選ぶことの重要性」を今後も理解する必要があるのではないのでしょうか。他人任せにするのではなく、国民一人ひとりが真剣な目で政権のチェックをすることが、我が国の命運をも握っているのです。(完)

- 主要参考文献：「逆説の日本史 4 中世鳴動編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379415>
- 「逆説の日本史 5 中世動乱編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379416>
- 「逆説の日本史 7 中世王権編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379418>
- 「逆説の日本史 10 戦国霸王編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379660>
- 「逆説の日本史 11 戦国乱世編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379681>
- 「逆説の日本史 12 近世曙光編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379682>
- 「逆説の日本史 13 近世展開編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379683>

YouTube 再生リスト「政権交代の歴史」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML4m6WLuSZEG4BcUhLNYWZt8>

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>